

『続女のせりふ』

伊藤雅子 著

福音館書店

2014年5月15日 発行

解説

「女のせりふ」がつくる主婦の思想

上野千鶴子

一九六五年。この年を憶えておこう。

国立市公民館で日本で初めての託児つき講座が実施された年。実現したのは、当時、その公民館職員だった伊藤雅子さん。

国立といえは「こくりつ」と呼ぶのだと思いきんていたわたしは「こくりつし」ってヘンだな、と思い、あとになって「くにたち」というのだと知り、最近になって国分寺と立川のあいだにあるから「くにたち」というのだと知るにいたった。そして国立市は、伊藤さんのこの事業のおかげで、忘れられない土地になり、一九六五年は忘れることの

できない年になった。歴史はこうやってつくられる。憶えておかなければならない年号は、明治維新や東京五輪の年ばかりではない。

公民館といえば、ウィークデーの昼間に開いているところ。そんなところに入入りできるひとは、時間の余裕のあるひとたちばかり、といえはお年寄り主婦になるが、子どもがいたらそれすらままならない。その子どもをひつかかえても出てきたいおんなのために、託児つき講座を思いついたのが伊藤さんだ。

子どもが生まれたらおんなは家において育児に専念するのがあたりまえ、出歩くなんてとんでもない、と思われていた時代のことだ。周囲が反対しただけではなく、子どもを預ける若いお母さんたちまでが、わずか午前中二時間の講座の時間に「子どもを預けてまで勉強したいと思うなんて、わたしは悪い母親なのかしら」と自責の念にかられたと聞いて、胸が痛む。それから五十年。女性センターで催しがあるときには託児がつくのはあたりまえになったし、講演会やコンサートにも託児つきが登場した。今では学会にも託児つきがある。デパートや居酒屋にまで託児つきが登場して、びっくりしたものだ。託児つき講座が「常識」になるまで、どれだけの時間がかかっただろうか。その最初の一步を踏み出したひとが、伊藤さんなのだ。

六〇年代の末、公民館に出てくるのはもっぱら無業の既婚女性、つまり主婦ばかり。それならいっそ主婦であることそのものを問うような講座を企画できないか、と思いついたのが、若き日の伊藤さんだった。女性史家のもろさわようこさんを講師に迎えて「私にとっての婦人問題」と題するセミナーが、一九七一年十二月から翌年三月までの四カ月間、定員二十名、託児室の定員二十名で実施された。その記録が『主婦とおんな国立市公民館市民大学セミナーの記録』（一九七三）である。毎週火曜日、九時四十五分から十二時半まで。受講料は無料、託児料は十五円のおやつ代実費十五回分で二百二十五円。本書を論じた西川祐子さんが、この時間設定と託児費の端数に目を留めている。「午前九時四十五分は、主婦が夫を会社に送り出し、掃除をすませ、洗濯物を干した後で公民館に駆けつけ、連れてきた子どもを保育室に落ち着かせるのに無理のない時間だったのだから」と。

『戦後思想の名著50』（二〇〇六）を岩崎稔、成田龍一と共に編んだとき、五十冊という限られた冊数のなかに、丸山眞男や吉本隆明などの著作にまじえて、この『主婦とおんな』を加えるようつよく主張し、その書き手に西川さんを指名したのはわたしだった。

西川さんは冒頭の一行でこう書いている。

「これは語源的な意味で、ラディカルな本である。始まりの根っこがここにある」「本書は内側から、制度をささえる『主婦』たちがみずからの立つ足場を切りくずすようにした思想闘争の記録である」(四四八、四四九ページ)

「思想闘争」だなんて、おおげさに聞こえるだろうか？

西川さんは、こうもつけ加えている。

「一九七六年から八五年までの『国連女性一〇年』のあいだに全国の都道府県の女性会館ほかで多数の女性史・女性学講座が開催された。多数の人たちが、講座への参加者の自発的エネルギーを束ね、受講生と講師が相互学習する方法を、本書や伊藤雅子の本から学んだ。(中略) 女たちの運動の初心と原初の力を刻んだ本書はくり返し読み返されるべきであろう」(四五五ページ)

おんなが地域で学ぶ……社会教育とか生涯学習とか呼ばれている女性向け講座の黎明期だった。そこでおんなたちは学んだ以上の力を手にした。そこからどのくらいの人材が育っていったことだろう。

同じ本のなかで、わたしは「主婦の思想」(二〇〇六)というコラムを書いた。

主婦に思想があるか、ですって？ もちろんありますとも。そう言って胸をはってさしだせるのが、『主婦とおんな』だった。その思想は、有名な思想家のように固有名を持たないが、無名のおんなたちの集団のなかでのつばやきやささやき、それをひきだしまとめあげた伊藤さんのような媒^{なだ}ちの力で、そこにあつた。

しゃべったのは主婦たちだが、そのことばをたしかに聴きとつたのは伊藤さんだった。

一九七二年。団塊世代の婚姻率がピークに達し、翌年の出生率が第二次ベビーブームをもたらしたあのころ。夫はサラリーマン、妻は専業主婦という、おんなにとつての「主婦の時代」が人口学的な多数派を占めようとしていた。のぞんで主婦になったひともいたが、余儀なく主婦になったひともいた。どちらにしてもおんなにとつて、主婦になる以外の選択肢がたいしてなかった時代のことだ。

伊藤さんはこう書いている。

「現在主婦である女だけでなく、まだ主婦ではない女も、主婦にはならない女も、主婦になれない女も、主婦であった女も、主婦であることが女のあるべき姿・幸せの像であると考えられている間は、良くも悪くも主婦であることから自由ではない。少なくとも多く

の女は、主婦であることとの距離で自分を測ってはいはしないだろうか」（『主婦とおんな』二一六ページ）

一九七二年。七〇年に生まれたウーマン・リブの叫びがまだ高らかに響いていたころのことである。どんなにメディアに揶揄されても、リブの声は市井の主婦たちにも届いていた。反発するにせよ、共感するにせよ、これまでの女性役割を問いなおす声は、主婦たちの足もとをゆるがさずにはいかなかっただろう。

女性史家の鹿野政直かの まさなさんに『婦人・女性・おんな』（一九八九）という著書がある。おんなの自称が「婦人」から「女性」へ、そして「おんな」へ、と変わってきた時代の流れを、リブを中心に論じたものである。それを思うと、『主婦とおんな』という題名は含蓄がふかい。

フェミニズムの大先輩、森崎和江さんが「無名通信」というミニコミを発刊したのが一九五九年。なぜ「無名」かといえば、「妻・母・主婦」という女に割り当てられた指席をすべて返上したい、という思いがこめられていたからだ。

創刊の辞から引用しよう。

「わたしたちは女にかぶされている呼び名を返上します。無名にかえりたいのです。な

ぜならわたしたちはさまざまな名で呼ばれています。母・妻・主婦・婦人・娘・処女……と」

なにもないあかはだかの「おんな」として、自分のことばを語る。『主婦とおんな』という題名には、そんな思いがこめられている。しゃべったのは主婦たちだが、そのことばをたしかに聴きとったのは伊藤さんだった。

本書を初めて読む読者のために、著者の伊藤さんというひとがどんなひとか知ってもらいたくて、つい口数が多くなった。

そんなことを何も知らなくても本書はじゅうぶんに読んでおもしろいが、背景を知ればもっとおもしろくなる。

伊藤さんは同じことを、その後もずっと何十年間もつづけてきたのだということが、本書『女のせりふ』を読むとわかる。

『正』が一九八五年から九五五年まで。

『続』が二〇〇〇年から一二年まで。

「母の友」に掲載された長寿連載だ。

「母の友」という雑誌名をみてさえ、そうなのか、母には友もないか、と思ってしまう。いないからこそ、こんな雑誌が必要なのか、と。孤立育児、密室育児の状況は変わっていない。伊藤さんは「赤ちゃん言葉しか使えない暮らしなんです」「託児つきのイベントを渡り歩いてた」という主婦のことを書き留める。七〇年代、それこそタコツボから必死の思いで這い出るようにして子連れで出てきたおんなたちの状況は、それから四十年後、どれほど変わったといえるだろうか？

これに伊藤さん自身の著書、『子どもからの自立 おとなの女が学ぶということ』（一九七五）と『女の現在 育児から老後へ』（一九七八）を加えると、ほとんど七〇年代からの「主婦の四十年史」を知ることができるだろう。

それを伊藤さんが聴きとった、おんな自身のことばで追ってみよう。

まずは『女のせりふ』から。

- 一九八五年「女には名前なんていらないうね」
- 一九八六年「おかあさんは、ま（待）っている（だけな）の」
- 一九八七年「でも、そういう男が好きなんですよ」
- 一九八八年「女の身分証明書って、夫の名刺なの？」

- 一九八九年「女がどうして可愛くなくちゃいけないんだい？」
 - 一九九〇年「主婦って、『バカ』の代名詞みたいに言われるのね」
 - 一九九一年「女は男の寝所として認識されている」
 - 一九九二年「いつのまに、家庭が買うものになったんだらうね」
 - 一九九三年「主婦として母としてなすべきことはしてきたと自負しております」
 - 一九九四年「風景が変わらないと（夫婦が）もたなくなっているのよ」
- そして『続女のせりふ』から。

二〇〇〇年「いい人間関係と思ってたけど、同調してくれる人とはかりつきあっただけかも」

- 二〇〇一年「夫は、私と一心同体だと思ってるらしいのよ」
- 二〇〇二年「結婚したいとは思わないけど、子どもはほしい」
- 二〇〇三年「天敵を持たぬ妻たち」
- 二〇〇四年「自分だけは違う」
- 二〇〇五年「主人が死んで 私、蝶々になっちゃった」
- 二〇〇六年「働いてはいても社会人になっっていなかった」

二〇〇七年「オバサンになっても幸せにしてくれますか」

二〇〇八年「オジサンみたいなオバサンも増えてきたよね」

二〇〇九年「彼女、やつと子どもの話をしなくなったね」

二〇一〇年「(介護には) まだ足りないという後ろめたさがつきまといます」

二〇一一年「結婚しないと生きていけなかったから」

もっと魅力的なせりふもあるが、主婦の暮らしにつきまとう感慨を、正統二巻にわたって拾ってみた。それぞれのせりふに愛情と共感のともなった、ときには辛辣な、伊藤さん自身のコメントがついている。

七二年からのおよそ四十年間、おんなは変わっただろうか？

遅々とした歩みながら、そしてためらいながら、行きつ戻りつ、それでも確実に、変化したのだろうか？ それもよい方へ、それとも困った方へ？

「私は会社と結婚したのに」(二九八五)の主婦は、「夫が失業したとき、『チャンスだ！』って思ったんです」(二九九三)を経て、「会社に属しているのは夫で、私ではないのだから」(二〇〇二)と言うに至った。「結婚しないと生きていけなかったから」(二〇一一)と語った七十代の女性を尻目に、「結婚したいとは思わないけど、子どもはほしい」(二

〇〇二)と堂々と言い放つ若いおんなたちが登場した。「幸せにしてやる？ おおきなお世話だ。女が幸せになるには男の力を借りなきゃいけないとでも思ってたのかい？ 笑わせないでよ」(二九八九)とフーテンの寅さんの前で啖呵たんかを切ったリリーの何年も後に、「オバサンになっても幸せにしてくれますか」(二〇〇七)というCMのせりふを、「なんとプライドのないことよ」と伊藤さんは一刀両断する。仕事をするおんなは増えたのに、「オジサンみたいなオバサンも増えてきたよね」(二〇〇八)と言われるはめになる。

そしてこうしたおんなどうしのやりとりを産んだ「たくさんの時を共有してきた」(二〇一一) おんなたちのゆたかなつながり。ただのママ友や気晴らしメイトではなく、共同の作業や活動をつうじて信頼を培い、遠慮なしに相手を批判しあえるなかまたち。「たくさんの時」とは、その時どきにつみかさねられた「たくさんの経験」の共有だ。そう言える手ごたえが、伊藤さんのいちばんの財産だろう。わたしが「女縁じょえん」と呼んだものだ(二〇〇八)。

そして伊藤さんは言う。

「こうして心に響くせりふに出会わせてもらった。やはり、女たちはいつも大事なことスゴイことをさらりと言う」

それを「主婦の思想」と呼んでわるいか。
そして何度でも言うが、しゃべったのは主婦たちだが、そのことばを確かに聴きとり、書き留めたのは伊藤さんだった。

わたしはついに主婦にならなかつた。それというのも、わたしの目の前で母が主婦をやっていたからだ。そしてそれに苦しんでいたからだ。わたしは「主婦」を研究テーマとして選び、主婦のやっていることってなあに？ 家事労働。家事労働ってなあに？ と問いを立てて、十年かけて『家長長制と資本制』（一九九〇）という大部の書物を著すに至った。思えば、「けっして母のようになりたくない」と母を反面教師とした不幸なそして不孝な娘だったわたしの、母の人生にとってのリベンジ戦だったのだとおもう。家事労働を女性の不払い労働として評価せよと主張したせいで、わたしはまちがって「主婦の味方」とすら、見なされてしまった。

わたしはついに主婦を選ばなかつたが、主婦になった友人たちをたくさん持っている。そしていつも彼女たちのふところの深さ、ひるまないつよさ、細部に届く気配りと目配り、アイディアと実行力に感嘆する。主婦だからというだけの理由で相手をあなどつた

ことはいちどもない。そしていつも驚くのは、この国では、これだけの実力と能力をそなえた女性たちが草の根にいて、無位無冠でいることだ。

おんが主婦にしかなれなかつた時代。主婦であることを「選ばされた」あの時代からめぐりめぐって最近になって、「結婚したら主婦」を選びたいという主婦願望の二十代の女たちが増えた、とメディアは報道する。皮肉なことに、主婦はいまやなりたくてもなかなかなれない特権的な選択肢になったかのようにみえる。

かといって、夫や子どもをつごうに合わせなければならぬ主婦の日常や、密室に閉じこめられて息の詰まるような子育ての環境、とつぜんふりかかってくる介護の負担などの現実は少しも変わっていない。歯がゆいような歩みのなかで、それでも伊藤さんやそのなかまたちのような先輩の女性たちがいてくれることが、何よりこころづよい。男の人生をうらやんだことなどなく、男のようになりたいと思つたことのないおんなにとって、伊藤さんのような女性の背を見ながら学ぶことは、「おんなでよかつたな」という感慨なのだ。

最後におねだりを。

伊藤さんの「女のせりふ」には、詩歌がよく出てくる。茨木のり子さんや石垣りんさんの詩、河野裕子さんや馬場あき子さんの短歌、時実新子さんの川柳、杉田久女の俳句。新聞歌壇や俳壇にもよく目を通していらっしゃるご様子がかがえる。これはわたしの直観なのだが、これだけ詩歌を愛し的確に評するひとが、ご自分で短歌や俳句をつくっていないとは思えない。本書のなかでは自作をひとつも披露しておられないが、できれば伊藤さんの家集を読みたいと思うのは、読者のわがままだろうか？

伊藤さんご自身の半生にわたる「女のうた」を聴いてみたい。いったいどんな調べだろうか……。

参考文献


- 伊藤雅子著「子どもからの自立 おとなの女が学ぶということ」未來社刊、一九七五
- 伊藤雅子著「女の現在 育児から老後へ」未來社刊、一九七八
- 岩崎稔・上野千鶴子・成田龍一編「戦後思想の名著50」平凡社刊、二〇〇六
- 上野千鶴子著「家父長制と資本制 マルクス主義フェミニズムの地平」岩波書店刊、一九九〇
- 上野千鶴子著「女縁」を生きた女たち」岩波現代文庫、二〇〇八
- 鹿野政直著「婦人・女性・おんな 女性史の問い」岩波新書、一九八九
- 国立市公民館市民大学セミナー著「主婦とおんな 国立市公民館市民大学セミナーの記録」未來社刊、一九七三

うえのちづこ 一九四八年富山県生まれ。東京大学名誉教授、立命館大学特別招聘教授。認定NPO法人WAN理事長。女性学、ジェンダー研究、介護研究のバイオニア。著書に『近代家族の成立と終焉』（岩波書店刊）、『おひとりさまの老後』（文春文庫）、『女たちのサバイバル作戦』（文春新書）等がある。

続女のせりふ

2014年5月15日 初版発行

著者 伊藤雅子

発行 株式会社 福音館書店 
郵便番号 113-8686
東京都文京区本駒込6丁目6番3号
電話 販売部 (03) 3942-1226
編集部 (03) 3942-2084
<http://www.fukuinkan.co.jp/>

印刷 図書印刷株式会社

製本 積信堂

- ・乱丁・落丁本は小社出版部宛ご送付ください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
- ・NDC 914/338ページ/18×13センチ
- ・ISBN 978-4-8340-8097-1

Inspired by Voices of Japanese Women, vol.2

Text ©Masako Ito 2014

Illustrations ©Ken'ichi Yamada 2000, '03, '04, '07, '09, '11, '12, '14

Published by Fukuinkan Shoten Publishers, Inc., Tokyo, 2014

Printed in Japan

日本音楽著作権協会(出)許諾第1402410-401号

続

女のせりふ

伊藤雅子



「主婦に思想があるか、ですって？
もちろんありますとも」

—— 解説 上野千鶴子 (社会学者)